



第7992号

2024年1月31日(水)

高齢の町襲った「まさかの大地震」

防災システム研究所 所長 山村 武彦

◆老朽化した家屋

石川県輪島市と志賀町で最大震度7が観測された能登半島地震。約1週間目の現場で見たのは、奥能登に向かう道路の著しい段差、亀裂、崩壊。そして、上から押しつぶしたように瓦屋根ごと倒壊したおびただしい住宅の残骸だった。日本の災害史上、これほどの大地震が元日に起きた例は過去にない。

能登の厳しい潮風に耐えるよう外回りはトタンなどを避け、屋根は能登瓦、外壁は杉やひのき板を重ねた「下見板張り」が先人の知恵を生かした伝統建築。しかし、65歳以上の高齢人口割合が、珠洲市52.2%、能登町51.4%、穴水町50.0%、輪島市46.9%(2021年10月1日時点)の町は、家屋の高齢化も進んでいた。

倒壊家屋の多くが1981年の新耐震基準前の建築と推定され、阪神淡路大震災と同じように古い木造家屋の1階が倒壊していた。NHKが珠洲市に設置していたライブカメラは、地震直後に町が激しく揺れ、家屋倒壊を思わせる立ち昇る土煙や屋根瓦の落下を映し、被害の大きさを予見させた。

◆災害報道の空白

発災12分後、気象庁は石川県能登に大津波警報を、山形県、新潟県上中越、佐渡、富山県、石川県加賀、福井県、兵庫県北部に津波警報、その他、広い地域に津波注意報を発表した。

その直後から、NHKの女性アナウンサーによる津波避難の呼び掛けが始まる。トーンを上げた絶叫調の呼び掛けが、結果として迅速避難に寄与したものと評価している。一方、空撮の出遅れもあってか、「災害報道のNHK」らしさがなかった。その日は終日災害報道を続けたものの、翌日からは体制を縮減したように見えた。3日目になるとニュース以外は番組宣伝や芸能などの放送。そうしたNHKの動きを民放も倣い、各局とも3日目で正月編成に戻している。

私は発災から1時間後に民放のスタジオに入ったが、最初は断片情報や未確認情報が多く、津波と余震の注意喚起に力を注ぐしかなかった。2日目、津波警報・注意報が全て解除され特別番組は打ち切られた。被害の様相が顕著になった4日目、各局は本腰を入れて災害報道に乗り出すことになる。

◆明日はわが身

救助・救援を求める被災地からの声を、深刻な通信障害と道路寸断が妨げていた。日暮れ間際、組織的にも手薄な正月、アクセスなどの地理的制約という悪条件が重なった災害だったにせよ、「災害が激甚であればあるほど、被災地からは発信できない」「災害時は、情報の断片から洞察、展開を予測し、外部から情報を取りに行かなければならない」との教訓が生かせなかった。初動対応にも影響を与えたのではと猛省している。

政府の地震調査委員会が公表した「30年間に震度6弱以上の揺れに見舞われる確率」で、能登半島の確率は約3%だったし、熊本地震を引き起こした布田川断層帯の地震発生確率は30年以内に1%未満だった。

発生確率が高いとされる地震だけでなく、今後も「まさかの大地震」は、時と所を選ばずどこでも起こり得る。想定に一喜一憂せず、住宅と室内の耐震化を徹底するとともに、水、食料、非常用トイレ、電池などを1週間分は備蓄する必要がある。
(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111 (代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003